

お母さんが知らない、
保育園での子どもたち



「お母さんのお腹には
切った跡がある」って、
それが自慢なのよ



子どもの「お母さん自慢」には限りがありません。何でも自慢のタネなのです。
「わたし、帝王切開で生まれたの」って、それだって立派な自慢です。

するとそれを聞いた子が「うちのママは盲腸切ってる」と自慢する。

もつとすごいというわけです。

一番すごかったのは、盲腸も切っているし胆石もとっている、そのうえ帝王切開をしたお母さん。もうそのYちゃんの話になるとみんな負けちゃう。でも嬉しいのです。その話が大好きでわくわくしちゃう。何べんでも聞きたがる。

Yちゃんはお風呂に入るたびにお母さんの三つの傷跡を眺めていたんでしょう。触って感心もしたのでしょうか。大きくなって女医さんになりました。

お母さんの傷を見て、話を聞いて、友達に自慢した子がお医者さんになる。だから私は、どこのおうちでも気がつかなくても早期教育をしているのよって言っています。

私がYちゃんに最期をみてもらいたいって言ったらね、冷ややかに「先生、悪いけど私は老人医療はやりません」って。産婦人科で命の誕生に関わりたいてすって。

3

子育ては

「抱いて」「降ろして」

「ほっといて」



子どもをうちに 閉じ込めないで

子どもは人に関心を持つことが大事です。

「社会は人間の力で成り立っているのですから、人を頼り、人に頼られ、人の間
において人になるのだ」と、佐々木正美先生が著書『子どもへのまなざし』でお



っしゃっています。

いろいろな人と出会って、何かをしてもらうのもいいし、してあげるのもいい。例えば障害があつて不自由でもどんな町中に出て、みなに手伝ってもらい、良質な人間関係を持ちながら快適な生活をしていくこと。これは決して人に迷惑をかけることにはならないでしょう。

お互いさまです。子どもの時代からそういう社会で育つてほしい。それが自然で当たり前のことになってほしい。そのなかで、自分はほんとうに大事な存在であり、自分以外の人も皆大切な存在なのだということを子どもなりにおぼえます。それは口で教えるより、生活の場で親が示すしかないと思います。

私の全盲の友だちは、お隣の三つの女の子と仲良しです。手を引いてもらおうと大人よりずっと上手なのよ、と信頼しています。

大人は申し訳ないくらい気を使って一生懸命やってくれるけれど、その子はおばちゃんは目が見えないことを当たり前前に受け入れているそうです。

子どもは正直で残酷とも言われますが、どうでしょうか。

大人は、つい相手のことをかわいそうだとか、不便だろうになんて考えてしまいます。

子どもは人と出会い、世の中にはいろんな人がいることを知りながら、社会の一員になっていくのです。